

〈原著論文〉

## 看護師の自己愛傾向が情動的共感性に及ぼす影響

—対人恐怖心性と自尊感情を調整変数として—

神宮寺陽子 岩永 誠

広島大学大学院総合科学研究科

### The Impact of the Narcissistic Predisposition of Nurses on Emotional Empathy: Anthropophobic Tendency and Self-Esteem as Modifying Variables

Yoko Jinguji Makoto Iwanaga

Graduate school of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

#### 〈要旨〉

看護師の共感性が低いことは、看護の質を悪化させ、チーム医療にも支障をきたす。そのため、看護師の自己愛傾向が共感性に及ぼす影響過程を明らかにして、対応法を考えることは、チーム医療の質を上げるうえで重要である。本研究は、対人恐怖心性や自尊感情が自己愛傾向と情動的共感性の関係性に及ぼす調整効果の検討を行った。看護師 276 名を対象に、質問紙調査を実施した。その結果、自尊感情および対人恐怖心性と調整効果が認められたのは、情動的共感性の下位因子の被影響性だけであった。過敏型自己愛が高く対人恐怖心性の下位因子の集団参加への不適応が高い場合、および、過敏型自己愛が高く自尊感情が低い場合に、被影響性が高くなることが明らかになった。過敏型自己愛傾向者は、対人恐怖心性が高い場合と自尊感情が低い場合に、他者からの評価を気にすることで、他者からの影響を受けやすく、相手に振り回されやすくなると考えられる。

#### 〈Abstract〉

The paucity of empathy in a nurse influences the quality of nursing and causes difficulties in team-based medical care. Therefore, it is important to discuss the influence exerted on empathy by a nurse's narcissistic proposition and to contemplate support methods required to improve the quality of team-based medical care. This study aimed to examine the moderating effects of the anthropophobic tendency and self-esteem of the narcissistic proposition on empathy. A questionnaire survey was administered to 276 nurses. The moderating effects were observed only in the influenceability which are subcategories of emotional empathy. The influenceability was high under hypervigilant narcissism and maladaptation to group participation which is one of subcategories of anthropophobic tendency, and under hypervigilant narcissism and low self-esteem. Individuals with hypervigilant narcissistic proposition with high anthropophobic tendency and low self-esteem are considered more easily influenced and manipulated by others.

#### キーワード

看護師	nurse
自己愛傾向	narcissistic proposition
情動的共感性	emotional empathy
対人恐怖心性	anthropophobic tendency
自尊感情	self-esteem

## I. 序論

看護において共感とは、医療関係者と患者の良好な関係を構築する上での基本能力とされ、飯野<sup>1)</sup>は他人の健康に責任をもつ職能集団としての大切な特性の一つとしている。共感性には、他者の心的・情動の状態を理解する認知的共感性<sup>2)</sup>と他者の感情と同じものを自分の中で経験する情動的共感性<sup>3)</sup>の2側面がある。患者に寄り添った看護を行う上で、患者の気持ちや考えを理解し、それを自分の中で追体験できる共感性を持つことは、重要である。医療場面における共感性は、これまで看護師の患者に対する共感性という視点で検討が行われてきた<sup>4) 5)</sup>。しかし、看護師にとっての人間関係は、患者やその家族との関係ばかりではなく、医療チームにおける関係性においても重要である。深田<sup>6)</sup>は、円滑な対人関係には他者理解が必要であり、そのためには共感が重要であると述べている。また、溝川ら<sup>7)</sup>は、他者理解を“他者の心的状態(特に感情)を認識し、推測し、理解する能力”と定義し、共感性のない他者理解はいじめや攻撃行動につながる危険性があると指摘している。

共感性の欠如に関連している個人特性に自己愛傾向がある。自己愛傾向とは、自分自身に関心が向けられ、自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚を持ち、さらにその感覚を維持したいという強い欲求を特徴とする<sup>8)</sup>。自己愛傾向には、自己誇大的で他者からの評価に鈍感な「誇大型自己愛」と自己誇大的でありながら他者からの評価に敏感な「過敏型自己愛」<sup>9)</sup>がある。誇大型自己愛者は他者に関心を示さず、根拠のない高い自己評価を維持するために誇大的・自己顕示的である一方、自己を否定され自己評価を低められると自分を守るために攻撃的になる傾向がある。過敏型自己愛者は他者の評価や反応に敏感で、自分にとって脅威となる場所や人を避けようとする対人恐怖心性を有しており、周囲の他者から回避的になる傾向を示す。両タイプとも自己中心的で他者とのコミュニケーションがうまくとれず、相手への情動的共感性が低いことが共通していると考えられる。このような特徴は、チーム医療内での信頼関係が築けず、スタッフ間の連携や協働ができなくなることが考えられ、安全な医療の提供

ができないといった問題に繋がる。

清水ら<sup>10)</sup>は、自己愛の高まりが対人恐怖心性を増大させると指摘している。自己愛傾向者は、他者からの否定的評価を避けるために対人関係を回避しようとするのが考えられる。自己愛傾向に加えて対人恐怖心性の高まりが、特に拒否的で冷淡な対人的対応を引き起こし、情動的共感性の低さを助長させると予想される。

自己の能力や価値について肯定的で適応的な個人特性に自尊感情がある。Rosenberg<sup>11)</sup>は、自尊感情が高いということは、他者との比較により生じる優劣感や完全感ではなく、自分自身の価値基準に照らして自分を価値のある人間だと捉えることだとしている。自尊感情の高さは、自己の安定性や他者との良好な関係に結びつく<sup>12)</sup>ことから、情動的共感性を高めると予想できる。

以上のことから、自己愛傾向は共感性の低下と関連し、その効果は対人恐怖心性や自尊感情によって調整されると考えられる。看護師にとって共感性は重要とされているが、共感性の欠如が特徴にある自己愛傾向との関連についての検討は行われていない。また、自己愛傾向と対人恐怖心性の関係や、自尊感情と共感性との関係については検討されているものの、自己愛傾向が共感性に及ぼす過程に対人恐怖心性や自尊感情が調整効果として作用するかについての検討はなされていない。

## II. 研究目的

本研究の目的は、看護師の自己愛傾向が情動的共感性に影響する過程において、対人恐怖心性や自尊感情が調整効果を示すかを検討することである。

以下の仮説を立てた。

仮説1) 自己愛傾向は情動的共感性と負の関連を示す。

仮説2) 自己愛傾向が高く、対人恐怖心性が高いと情動的共感性を低める。

仮説3) 自己愛傾向が高くても、自尊感情が高いと情動的共感性を高める。

### Ⅲ. 方法

#### 1. 調査対象者

H県内の3市7施設の総合病院に勤務する看護師276名に調査紙を配布し、206名(男性11名, 女性195名)を回収した。データの欠損はなく、206名全員を分析対象とした。年齢は、20歳代(49名), 30歳代(42名), 40歳代(82名), 50歳代(27名), 60歳代(6名)であった。

#### 2. 調査時期と方法

2016年9月から2017年1月にかけて質問紙調査を実施した。病院の看護部に調査依頼を行い、その病院の許可を受けたのちに病棟看護師に調査を実施した。調査協力者に対しては、調査の目的や意義、方法、個人情報保護に関する説明や、調査へは自由参加であり強制ではないことを書面に明記して同封した。回収は、郵送により行った。

#### 3. 質問項目

1) フェイスシート:年齢, 性別, 役割, 勤務病棟, 通算勤務年数。

#### 2) 自己愛傾向

相澤<sup>13)</sup>が作成した自己愛的人格項目群尺度(誇大特性20項目・過敏特性28項目)を使用した。それぞれの項目は、「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5段階で評定した。

#### 3) 情動的共感性

加藤ら<sup>14)</sup>が作成した情動的共感性尺度(計24項目)を使用した。それぞれの項目は、「全くちがうと思う(1)」から「全くそうだと思う(7)」までの7段階で評定した。

#### 4) 対人恐怖心性

堀井ら<sup>15)</sup>が作成した対人恐怖心性尺度(計30項目)を使用した。それぞれの項目は、「全くそうではない(1)」から「全くそうだ(7)」までの7段階で評定した。

#### 5) 自尊感情

山本ら<sup>16)</sup>が作成した自尊感情尺度(計10項目)を使用した。それぞれの項目は、「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」までの5段階で評定した。

#### 4. 倫理的配慮

本研究は、広島大学大学院総合科学研究科倫理委員会の承認(受付番号:28-20)を得て実施した。

調査協力者に対しては、調査に回答しなくても本人の不利益にはつながらないこと、協力者の意志によって回答を終了した場合、当該個人に関わる資料は破棄されること、研究成果を公表する際には、集団データとして公表されるために個人が特定されないこと、回答をもって同意を得たことにすることを書面にて説明した。

#### 5. 分析

各尺度の因子を確定するために探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。因子数の確定はスクリープロットより行い、因子負荷量が.35以下の項目やダブルローディングした項目を削除した。各因子の平均項目得点を因子得点として分析に用いた。情動的共感性の下位尺度に関連する要因を明らかにするため、情動的共感性を目的変数とし、自己愛傾向と対人恐怖心性、自尊感情を説明変数とした重回帰分析(ステップワイズ法)を実施した。また、対人恐怖心性と自尊感情の調整効果を検討するため、情動的共感性を目的変数とし、自己愛傾向と対人恐怖心性、自尊感情を説明変数として、第1ステップで主効果成分を、第2ステップで交互作用項を投入した階層的重回帰分析(強制投入法)を実施した。分析は清水<sup>17)</sup>の統計プログラムHADを使用した。

### Ⅳ. 結果

#### 1. 各尺度の因子構造の確定

##### 1) 自己愛的人格項目群尺度

自己愛的人格項目群尺度の48項目について因子分析を行い、スクリープロット法により、3因子が妥当だと判断した。第1因子には“周りの人の視線が気になり、落ち着かない。”“人といると、馬鹿にされたり軽く扱われはしないかと不安になる。”などの項目からなり、「過敏型自己愛」因子と命名した。第2因子には“人の注目を浴びるのが好きだ。”“私にはもって生まれたすばらしい才能がある。”などの項目からなり、「誇大型自己愛」因子と命名した。第3因子には“人と自然に付き合えない。”“人に近づきたい気持ちがあるにもかかわらず、人を避けてしまう。”などの項目からなり、「非社交性」因子と命名した。アルファ係数は、「過敏型自己愛」因

子で .908, 「誇大型自己愛」因子で .899, 「非社交性」因子で .824 と高く, 十分な内的一貫性を示していることが確認された。

## 2) 情動的共感性尺度

情動的共感性尺度の 24 項目について因子分析を行い, スクリーンプロット法により, 3 因子が妥当だと判断した。第 1 因子は“私は人がうれしくて泣くを見ると, しらけた気持ちになる”“私は他人の涙を見ると, 同情的になるよりも, いらだってくる。”などの項目からなり, 「冷淡な反応」因子と命名した。第 2 因子は“私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きだ。”“私は人が冷遇されているのを見ると, 非常に腹が立つ。”などの項目からなり, 「共感的な反応」因子と命名した。第 3 因子は“私は大勢の中で一人ぼっちでいる人を見ると, かわいそうになる。”“私は身寄りのない老人を見ると, かわいそうになる。”などの項目からなり, 他者からの影響を受けやすい「被影響性」因子と命名した。アルファ係数は, 「冷淡な反応」因子で .788, 「共感的な反応」因子で .738, 「被影響性」因子で .722 と高く, 十分な内的一貫性を示していることが確認された。

## 3) 対人恐怖心性尺度

対人恐怖心性尺度の 30 項目について因子分析を行い, スクリーンプロット法により, 3 因子が妥当だと判断した。第 1 因子は“人が大ぜいいると, うまく会話のなかに入っていけない。”“集団のなかに入らなれない。”などの項目からなり, 「集団参加への不適応」因子と命名した。第 2 因子は“充実して生きている感じがしない。”“計画を立てても実行がとまらなれない。”などの項目からなり, 「無能力感」因子と命名した。第 3 因子は“顔をジーンと見られるのがつらい。”“人と目を合わせていられない。”などの項目からなり, 「対面不安」因子と命名した。アルファ係数は, 「集団生活への不適応」因子で .914, 「無能力感」因子で .880, 「対面不安」因子で .808 と高く, 十分な内的一貫性を示していた。

## 4) 自尊感情尺度

自尊感情尺度の 10 項目について因子分析を行い, 原版に従い, 1 因子であることを確認した。「自尊感情」因子と命名した。アルファ係数は, .866 と高く, 十分な内的一貫性を示していることが確認された。

## 2. 情動的共感性と自己愛傾向, 対人恐怖心性, 自尊感情の相関

それぞれの尺度の下位因子得点の相関分析を行った結果を Table 1 に示す。情動的共感性の冷淡な反応因子は, 自己愛傾向の過敏型自己愛因子 ( $r = .215, p < .01$ ) と誇大型自己愛因子 ( $r = .282, p < .01$ ), 非社交性因子 ( $r = .348, p < .01$ ), 対人恐怖心性の集団参加への不適応因子 ( $r = .209, p < .01$ ) と無能力感因子 ( $r = .213, p < .01$ ), 対面不安因子 ( $r = .395, p < .01$ ) と正の相関を示した。情動的共感性の共感的な反応因子は, 自尊感情の自尊感情因子 ( $r = .154, p < .05$ ) と正の相関を示し, 対人恐怖心性の対面不安因子 ( $r = -.282, p < .01$ ) と負の相関を示した。情動的共感性の被影響性因子は, 自己愛傾向の過敏型自己愛因子 ( $r = .158, p < .05$ ) と誇大型自己愛因子 ( $r = .161, p < .05$ ), 対人恐怖心性の無能力感因子 ( $r = .153, p < .05$ ) と正の相関を示した。

## 3. 情動的共感性と自己愛傾向, 対人恐怖心性, 自尊感情との関連

情動的共感性に影響を及ぼす自己愛傾向, 対人恐怖心性, 自尊感情の検討を行うために, 重回帰分析を行った。その結果を Table 2 に示す。

情動的共感性の冷淡な反応因子には, 自己愛傾向の誇大型自己愛因子 ( $\beta = .248, p < .01$ ) と非社交性因子 ( $\beta = .157, p < .05$ ), 対人恐怖心性の対面不安因子 ( $\beta = .283, p < .01$ ) が正の関連を示した。情動的共感性の共感的な反応因子には, 自己愛傾向の過敏型自己愛因子 ( $\beta = .221, p < .01$ ) と自尊感情の自尊感情因子 ( $\beta = .147, p < .05$ ) が正の関連を示し, 対人恐怖心性の対面不安因子 ( $\beta = -.323, p < .01$ ) が負の関連を示した。情動的共感性の被影響性因子は, 自己愛傾向の過敏型自己愛因子 ( $\beta = .172, p < .05$ ) と誇大型自己愛因子 ( $\beta = .174, p < .05$ ) が正の関連を示した。調整済み  $R^2$  は, 冷淡な反応因子では .236, 共感的な反応因子では .103, 被影響性因子は .055 であった。被影響性因子の説明分散が非常に小さいことがわかる。

Table 1 情動的共感性と自己愛傾向, 対人恐怖心性, 自尊感情の相関の相関

	自己愛傾向		情動的共感性			
	過敏型自己愛	誇大型自己愛	非社交性	冷淡な反応	共感的な反応	被影響性
自己愛傾向						
過敏型自己愛						
誇大型自己愛	-.079					
非社交性	.633**	.084				
情動的共感性						
冷淡な反応	.215**	.282**	.348**			
共感的な反応	.065	.029	-.128	-.192**		
被影響性	.158*	.161*	.113	-.124**	.394**	
自尊感情	.070	.272**	.014	.061	.154*	.072
対人恐怖心性						
集団参加への不適応	.655**	-.205**	.713**	.209**	-.039	.049
無能力感	.645**	-.054	.544**	.213**	-.079	.153*
対面不安	.515**	.074	.603**	.395**	-.206**	.083

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

	自尊感情	対人恐怖心性		
		集団参加への不適応	無能力感	対面不安
対人恐怖心性				
集団参加への不適応	-.109			
無能力感	-.042	.584**		
対面不安	.025	.579**	.429**	

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

Table 2 情動的共感性と自己愛傾向, 対人恐怖心性, 自尊感情との関連

		情動的共感性		
		冷淡な反応	共感的な反応	被影響性
自己愛傾向	過敏型自己愛		.221**	.172*
	誇大型自己愛	.248**		.174*
	非社交性	.157*		
対人恐怖心性	対面不安	.283**	-.323**	
自尊感情	自尊感情		.147*	
	$R^2$	.236**	.103**	.055**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

#### 4. 自己愛傾向が情動的共感性に及ぼす影響過程における対人恐怖心性及び自尊感情の調整効果

自己愛傾向が情動的共感性に影響する過程において、対人恐怖心性や自尊感情が調整的に関連しているのかを検討するために、それぞれの下位因子の交互作用項をステップ2で投入した階層的重回帰分析を行った。交互作用項が有意となった結果のみをTable 3に示す。交互作用が有意であったのは、目的変数が情動的共感性の被影響性因子の場合のみであった。被影響性因子に対して、過敏型自己愛因子と集団参加への不適応因子の交互作用が有意であった [ $F(3, 202) = 3.97, p < .05$ ]。Figure 1に示したように、過敏型自己愛の単純主効果の検定を行ったところ、集団参加への不適応高群のみにおいて過敏型自己愛の効果が有意 ( $\beta = .381, p < .01$ ) であるこ

とがわかった。また、情動的共感性の被影響性因子は、過敏型自己愛因子と自尊感情因子の交互作用が有意であった [ $F(3, 202) = 3.55, p < .05$ ]。Figure 2に示したように、過敏型自己愛の単純主効果の検定を行ったところ、自尊感情低群のみにおいて過敏型自己愛の効果が有意 ( $\beta = .307, p < .01$ ) であることがわかった。これらのことから、過敏型自己愛が高く、対人恐怖心性の集団参加への不適応が高い場合やあるいは自尊感情が低い場合に、情動的共感性における被影響性が強まることがわかった。

#### V. 考察

本研究は、看護師の自己愛傾向が情動的共感性に影響する過程において、対人恐怖心性や自尊感情が調整的に関連しているのかを検討することを目的と

**Table 3** 自己愛傾向が情動的共感性に及ぼす影響過程における対人恐怖心性及び自尊感情の調整効果  
目的変数：被影響性

	説明変数		説明変数		交互作用	$R^2$	$\Delta R^2$
Step1	過敏型自己愛	.220*	集団参加への不適応	-.095		.030*	
Step2	過敏型自己愛	.226*	集団参加への不適応	-.070	過敏型自己愛 × 集団参加への不適応	.162*	.026*
Step1	過敏型自己愛	.254*	自尊感情	.061		.029 <sup>+</sup>	
Step2	過敏型自己愛	.167*	自尊感情	.109	過敏型自己愛 × 自尊感情	-.154*	.021*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

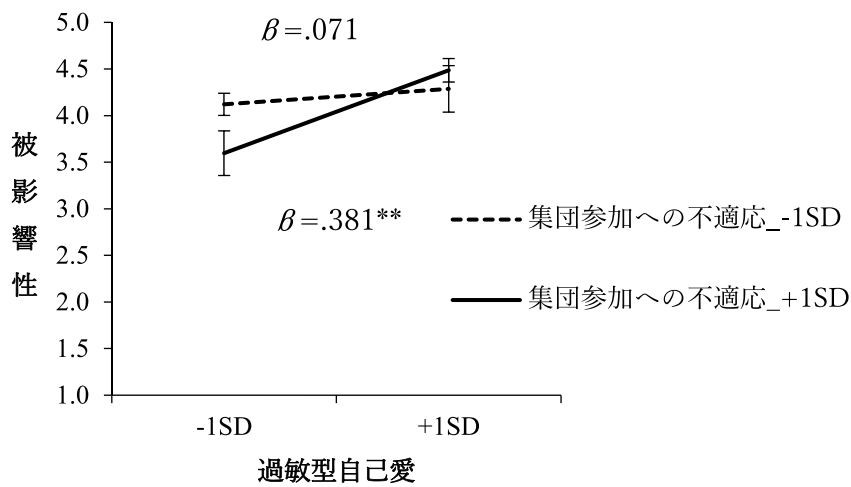


Figure 1 被影響性に対する下位検定の結果

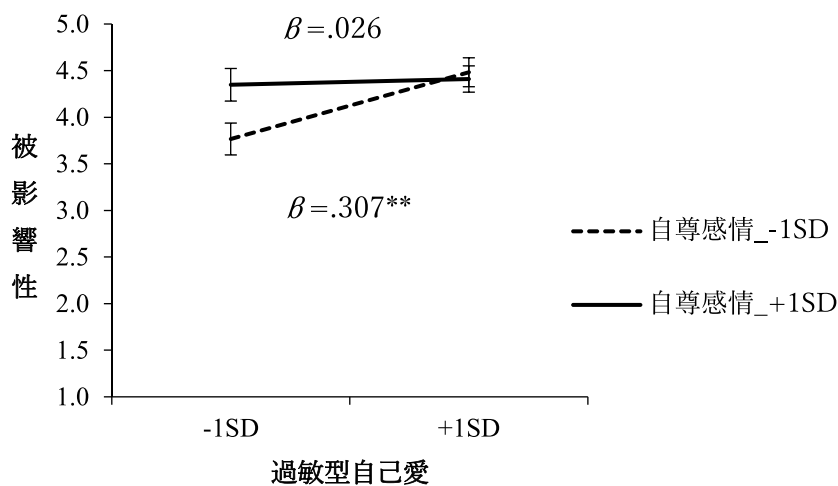


Figure 2 被影響性に対する下位検定の結果

した。

### 1. 各尺度の因子構造について

自己愛的人格項目群尺度<sup>13)</sup>の原版は、過敏型自己愛を3因子、誇大型自己愛を4因子の計7因子であったが、本研究では、「過敏型自己愛」と「誇大型自己愛」の2因子に「非社交性」の加わる3因子構造となった。原版において「過敏型自己愛」および「誇大型自己愛」を構成する下位因子がまとまって、上位概念である「過敏型自己愛」と「誇大型自己愛」として集約されていた。さらに、自己愛に共通した特徴である「非社交性」が独立した因子として構成されていた。このことから、本研究における因子分析の結果は、自己愛傾向の全体像を示していると考えられる。情動的共感性尺度<sup>14)</sup>は、原尺度因子とほぼ同一の因子からなる3因子構造をすることが確認できた。対人恐怖心性尺度<sup>15)</sup>の原尺度は6因子であったが、本研究では3因子となった。原版の「集団に溶け込めない」因子が「集団参加への不適応」因子に、「社会的場面で当惑する」因子や「自分を統制できない」因子、「生きることに疲れている」因子が「無能力感」因子に、「自分や他人が気になる」因子や「目が気になる」因子が「対面不安」因子に対応していた。このように内容的には、対人恐怖心性の全体像を示していると考えられる。

### 2. 仮説の検討

#### 1) 情動的共感性に及ぼす自己愛傾向、対人恐怖心性、自尊感情の効果

情動的共感性に影響を及ぼす要因の検討を行うために、情動的共感性の下位因子を目的変数とし、自己愛傾向、対人恐怖心性、自尊感情の下位因子を説明変数とした重回帰分析を行った結果、自己愛傾向の誇大型自己愛は情動的共感性の冷淡な反応と被影響性に、過敏型自己愛は共感的な反応と被影響性に、非社交性は冷淡な反応に正の関連を示した。誇大型自己愛や非社交性は冷淡な反応に正の関連を示していることから、仮説1「自己愛傾向は情動的共感性と負の関連を示す」は一部支持された。誇大型自己愛が冷淡な反応や被影響性と正の関連を示したのは、誇大型自己愛者は自己評価を高く保つために高飛車な態度をとり、自己を一方的に押しつけるような態度をとるからだと考えられる。また、過敏型自

己愛が共感的な反応や被影響性と正の関連を示したのは、過敏型自己愛者は対人恐怖心性が高いために他者から拒否されないように共感的な態度をとり、医療チームのスタッフに認められたいという思いがスタッフの影響を受けやすくさせると考えられる。自己愛傾向の非社交性が冷淡な反応と正の関連を示したのは、自己愛傾向者は自分が傷つきたくないために周囲と関われないことが態度に現れたものと考えられる。

#### 2) 自己愛傾向が情動的共感性に及ぼす効果への対人恐怖心性および自尊感情の調整効果

自己愛傾向の過敏型が高く対人恐怖心性の集団参加への不適応が高いと、情動的共感性の被影響性が高まることが示された。したがって、仮説2「自己愛傾向が高く、対人恐怖心性が高いと情動的共感性を低める」は支持されなかった。過敏型自己愛者は他者からの評価に過敏であり、自己の言動に対して相手を不快にしているのではないかという不安を抱きやすいことから、被影響性が高まったものと考えられる。さらに、集団活動にうまく参加できていないという思いがあるため、周囲からどう思われているのかが気になり、相手の影響を受けやすくなったものと考えられる。

また、過敏型自己愛が高く自尊感情が低いと情動的共感性の被影響性が高まることが示された。したがって、仮説3「自己愛傾向が高くても、自尊感情が高いと情動的共感性を高める」は支持されなかった。過敏型自己愛者は対人恐怖心性が高いために、自己概念が否定的<sup>18)</sup>となり、自己の自信が傷つきやすくなったと考えられる。そのため、自尊感情の低い過敏型自己愛者の自己概念は否定的になっており、自己を主張することで他者から拒否されてさらに自分が傷つくことを避けるために周囲の影響を受けやすくなったものと考えられる。

#### 3. 看護師の共感性を高めるために

看護師の共感性を高めるためには、共感的な反応を促進させ、冷淡な反応を抑制させることが大切であり、自尊感情を高める働きかけや対面不安を低めるための働きかけが重要である。自尊感情を高めるためには、自己に対する肯定感をもつことが重要である。自己をとりまく他者や環境に対する肯定感を

もつことが自己肯定感につながるから<sup>19)</sup>、自尊感情の低い人に対して、他者や環境への肯定感を高めるよう働きかけ、自己を肯定的に捉えるようにすることが大切である。一方、対面不安は、他者と直接対面してコミュニケーションすることが脅威的で、他者から否定的に評価されるのではないかと懸念することで生じる<sup>20)</sup>。対面不安を軽減するためには、医療チームのスタッフから否定的に評価されているわけではないことを理解させ、医療チームのスタッフと対面してのコミュニケーションが脅威的ではないということを実感させることが大切である。自己愛を増長させない程度で、一緒に働いている医療チームのスタッフから肯定的な評価を受けるような状況を体験させ、対面不安を軽減させるようにすることが課題である。自尊感情を高める働きかけや、対面不安を軽減させる働きかけを通して、医療チームのスタッフ、そして患者への共感的な反応を促すことにつながると考えられる。

#### 4. 研究の限界と課題

本研究では看護師を対象として自己愛傾向が情動的共感性に及ぼす影響において対人恐怖心性と自尊感情の調整効果を検討したが、情動的共感性の被影響性のみ調整効果が認められただけであった。冷淡な反応と共感的な反応においては調整効果が認められなかったのは、対人恐怖心性と自尊感情以外の要因が関連している可能性があり、自己肯定感や自己開示、アイデンティティの確立といった新たな要因を取り上げて検討する必要がある。

## VI. まとめ

本研究では、看護師の自己愛傾向が情動的共感性に影響する過程において、対人恐怖心性や自尊感情が調整的に関連しているのかについて検討した。過敏型自己愛傾向者は、他者の反応に敏感で、集団参加への不適応という対人恐怖心性があることによってより被影響性が強くなることがわかった。医療チームとして行動することが本人にとって負担になり、その反応として表出される言動が周囲に悪い影響をもたらすと考えられる。自尊感情が低いことによって自己愛傾向者における被影響性が高くなることから、自己に対する肯定感を高め、自尊感情を維

持することが大切であるといえる。

## 文献

- 1) 飯野英親：看護婦の共感性—性格特性としての共感性の一般的傾性—，看護技術，44(13)：103-106，1998
- 2) Dymond, RF: A scale for the measurement of empathic ability, *Journal of Consulting Psychology*, 13(2): 127-133, 1949
- 3) Stotland, E: Exploratory investigations of empathy, in Leonard Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology*, 4: 271-314, 1969
- 4) 福田正治：看護における共感と感情コミュニケーション，富山大学看護学会誌，9(1)：1-13，2009
- 5) 伊藤祐紀子：患者—看護者関係における共感のプロセス，日本看護科学会誌，23(1)：14-25，2003
- 6) 深田美香：患者—看護者関係における他者理解のあり方についての検討～共感性と自己受容性についての概念を中心に～，鳥取大学医療技術短期大学部紀要，29：43-49，1998
- 7) 溝川藍，子安増生：他者理解と共感性の発達，心理学評論，58：360-371，2015
- 8) 小塩真司：青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連，日本教育心理学研究，46：280-290，1998
- 9) Gabbard, GO: *Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM- IV edition*, 65-88, American Psychiatric Press, Washington, DC, 1994
- 10) 清水健司，海塚敏郎：青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連，教育心理学研究，50：54-64，2002
- 11) Rosenberg, M: *Society and the adolescent self-image*, 15, Princeton University Press, Princeton, NJ, 1965
- 12) 新見直子，川口朋子，江村理奈，越中康治，目久田純一，前田健一：青年期における自己愛傾向と自尊感情，広島大学心理学研究，7：125-



- 138, 2007
- 13) 相澤直樹：自己愛的人格における誇大特性と過敏特性, 教育心理学研究, 50 : 215-224, 2002
- 14) 加藤隆勝, 高木英明：情動的共感性尺度, 心理測定尺度集Ⅱ, サイエンス社, 119-125, 2011
- 15) 堀井俊章, 小川捷之：対人恐怖心性尺度, 心理測定尺度集Ⅲ, サイエンス社, 193-198, 2013
- 16) 山本真理子, 松井豊他：自尊感情尺度, 心理測定尺度集Ⅰ, サイエンス社, 29-31, 2012
- 17) 清水裕士, 村山綾, 大坊郁夫：集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1), コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用
- 電子情報通信学会技術研究報告, 106(146) : 1-6, 2006
- 18) 岡田努, 永井徹：青年期の自己評価と対人恐怖心的心性との関連, 心理学研究, 60 : 386-289, 1990
- 19) 中間玲子：自尊感情と心理的健康との関連再考—「恩恵享受的自己感」の概念提起—, 教育心理学研究, 61 : 374-386, 2013
- 20) 西村洋一：コミュニケーション時の状態不安および不安生起に関連する要因の検討—異なるコミュニケーションメディアを用いた比較—, パーソナリティ研究, 13(2) : 183-196, 2005